

中国図書館学に対する外国の影響
——外国文献翻訳の数量的分析——

The Influence from Foreign Countries to the Development
of the Library Science of China
——A Statistical Analysis on Translation Literature of Library Science——

陳 建 宏
Jian Hong Chen

Résumé

The purpose of this paper is to present the influence from foreign countries to the development of the library science of China with a statistical method. The characteristics of the development of the library science of China were discussed, and the translation literature on library science of foreign countries was analyzed chronologically by the contents and the nations of the original literature.

Four indexes, which cover the literature on the library science of China from 1901 to 1992 were used in the study. The conclusion are as follows: 1) The influence of the foreign library science was affected distinctly by the political and social situation of China. 2) The literature of America, Soviet, Japan, England, German are most frequently translated into Chinese. 3) The influence from the foreign countries varied on characteristics in different period. 4) The influence from different countries varied in different field. 5) The influence on different field varied in different period.

- I. はじめに
- II. 調査分析の方法
 - A. 時期の区分
 - B. 分野の区分
 - C. 国別の選択
- III. 中訳論文の調査結果
 - A. 1901年～1949年
 - B. 1949年～1977年
 - C. 1977年～1992年
- IV. 外国の影響についての考察
 - A. 時代別

陳 建宏：東亜工機株式会社，神奈川県海老名市中新田西柳原 3268

Jian Hong Chen: Toa kohki Co., Ltd. 3268, Nishiyanagihara Nakashinden Ebina-city Kanagawa-prefecture
1995年6月17日受付

中国図書館学に対する外国の影響

B. 分野別

C. 国別

V. おわりに

I. はじめに

中国古代では図書館学という名称はなかったが、図書館学に関する知識はずっと前から存在しているようである。古代の史書『周礼』、『史記』の中では、古代の図書管理職に当たる史官についてすでに記述されており、その後の多くの史書の中でも図書の目録編成と図書分類が論述されている。また、公的、個人的な蔵書目録、図書の版本、蔵書楼¹⁾、出版者と蔵書家に関する著作の中では、図書館実践についての理論と方法も反映されている。さらに古代中国の蔵書楼の活動は中国の図書館学発展の出発点として多くの経験と知識を提供した。それゆえ、多くの中国の図書館学者はこれらの図書館に関する知識および図書館活動については中国の古代図書館学と名付けている²⁾。

一つの体系を持つような近代図書館学の出現は、19世紀末期に近代図書館が現われた後のことである。19世紀の末から20世紀のはじめには、西洋の科学文化の伝来にともなって、図書館学という概念が現われた。最初は、外国の図書館学著作の翻訳が主であったが、1913年金陵大学の図書館学課程の設立、また1920年の武昌文華大学図書科の創立に伴って、中国の図書館学は一つの学問として成立、中国近代図書館学が形成された。

19世紀末から現在までの約百年の間、中国の図書館学は、絶えず外国図書館学から先進的なものを導入し、吸収しつつある。中国近代図書館学の誕生と成長の各時期においては、アメリカ、ソ連、日本など諸外国の図書館学は中国図書館学に対して強い影響を与えた。1910、1920年代の図書館学者の外国への留学から、1980、1990年代の図書館学研究領域の拡大、翻訳論文の増大までの中国近代図書館学の歴史を概観してみると、外国の図書館学は中国の図書館界に対して視野の拡大、古い閉鎖的な観念の打破、図書館学研究の発

展などに関して不可欠な存在であることは過言ではない。

本稿では、具体的な中国図書館の実務や活動に与えた外国の影響を論議せず、図書館現象の過程を分析し体系付ける科学とする近代中国図書館学に対する外国の影響を中心に焦点をあてて検討するつもりである。

中国図書館学に対する外国図書館学の影響については、これまで発表された論文の中では多少論議されている。しかし、これらの研究はほとんど質的な分析に基づき、しかも、ある分野、ある時期に限られたものである。内容的な分析と統計的な分析を用いた、中国の図書館学に対する諸外国の影響の全貌についての研究は行なわれていない。そこで、本研究は、中国図書館学史の研究の一環として、中国の近代図書館学が誕生する前の19世紀末から現在までの約百年間にわたって、諸外国からの影響の全貌を明らかにすることを意図したものである。

II. 調査分析の方法

本稿では、中国図書館学の誕生、発展を大きく3つの時期に分けて、各時期における中国図書館学の特色を外国図書館学関係の論文の推移、中訳論文数の推移と関係づけて、中国の図書館学に対する諸外国の影響を検討する。

外国の影響をもたらす重要なルートの一つと考える中訳論文についての調査、考察は本稿の主要な方法として持ち込まれる。1901年から1992年までの間に発表された中訳論文を対象に、発表の年代別、論文の分野別と原著者の国別によってそれぞれの数量的分析と、論文の内容的な分析を行なう。

図書館学関係の中訳論文は次の4種類の目録、索引から抽出し、統計的な分析が行なわれた。

1) 『図書館学論文索引第一輯』³⁾

李鐘履氏の『図書館学論文索引第一輯』は清朝

末期から1949年まで中国の雑誌、新聞に載っていた図書館学に関する5,000件あまりの論文を収録している。その収録範囲は、図書館学理論、図書館の管理、図書館の政策と法令および歴史、目録学と出版、印刷など図書館学に関する各分野が含まれている。

2) 『図書館学情報学档案学論著目録1949-1980』⁴⁾

中国の華東師範大学図書館学情報学系と図書館が共同で編集した『図書館学情報学档案学論著目録1949-1980』の収録範囲は1949年から1980年までの間台湾を除く中国で出版された図書館学、情報学、档案学(公文書学)に関する論文、著作である。収録項目は合計11,000余りある。中国で出版された雑誌100種余り、論文集約100種、そして大学、短大の雑誌、紀要と主な新聞が収録されている。

3) 『図書館学情報学論文索引1981-1989』⁵⁾

中国の南京図書館が編集した『図書館学情報学論文索引1981-1989』は1981年から1989年にわたる中国の図書館関係雑誌79種、論文集46種、大学、短期大学の雑誌と紀要40種、主な新聞数種に載っている図書館学、情報学関係論文を30,100件あまり収録している。

4) 『図書館学情報学論文題録一九九零年』⁶⁾、『図書館学情報学論文題録一九九一年』⁷⁾と『図書館学情報学論文題録一九九二年』⁸⁾

北京大学信息管理系(原名図書館学情報学系)資料室が編集した『図書館学情報学論文題録』は、1年に1冊が編集されており、主な図書館学関係の雑誌、大学、短大の雑誌、紀要、約130種が収録されている。

次には、中国図書館学の時期の区分、図書館学関係論文及び中訳論文の分野の区分と、中訳論文原著者の国別の区分について説明する。

A. 時期の区分

中国図書館学の時期の区分については、いままで明確な定義はまだできていないが、ここでは代表的ないくつかの説を取りあげてみる。

1) 2000年前の漢時代で中国最初の目録が作ら

れ、図書分類体系が生まれた時から、封建社会最後の清朝までの期間を中国図書館学の孕み時期、清朝末期の維新改良運動が行なわれた19世紀の後半から20世紀のはじめまでの期間を中国近代図書館学の萌芽期、1911年の辛亥革命から1949年の中華人民共和国の成立までの期間を近代図書館学の創設期、1949年から現在までは中国図書館学の発展期である⁹⁾。

2) 清朝までが中国古代図書館学で、1920年代は中国近代図書館学の創立期で、1949年以降は新中国図書館学の発展期である¹⁰⁾

3) 20世紀に入ってから、中国の古代図書館学が徐々に衰退しつつ、かわりに、近代図書館学が成長してきた¹¹⁾。

4) 中国の甲骨文献が現われた殷時代後期(紀元前14-11世紀)から本世紀のはじめまでが中国図書館学の萌芽時期で、1910、1920年代頃は設立期で、20年代から1949年の中華人民共和国の成立までは発展期で、1949年からは成熟期である¹²⁾。

5) 中国図書館学史の時期の区分は中国社会史の区分に基づくべきである。つまり、1840年のアヘン戦争までは中国の古代図書館学史である。1840~1919年の間は中国の近代図書館学史で、1919~1949年の間は中国の現代図書館学史で、1949年以降は当代図書館学史である¹³⁾。

これらの学説をまとめてみると、2つのことが指摘できる。一つは近代図書館学の開始に対して統一した区分はまだできていない。もう一つは、1949年以降は中国図書館学の一つの新しい時期で区分されていることが明らかである。

以上の観点を吸収し、また中国近代政治、社会的な変動を参考して、本稿では、図書館学の誕生から現在までの発展を次のような3つの時期に分ける。

1) 中国近代図書館学の誕生の基礎である近代図書館が現われはじめた19世紀末期から中華人民共和国の成立の1949年までを、中国の近代図書館学の創設期とする。

この時期に起きたことは、諸外国からはじめて図書館の思想、研究理論の伝来、近代図書館の現

中国図書館学に対する外国の影響

れ、代表的な図書館学者の出現、有力な図書館学の著作論文の出版、専門雑誌の刊行、図書館学学校教育の開始、新図書館運動の展開、図書館協会の成立などが挙げられる。これらはすべて一つの学問が誕生する際の特徴として考えられる。

2) 1949年から1977年中国の文化大革命が終わるまでを、中国図書館学の変換期とする。

この時期では、中華人民共和国の成立に伴って、中国は社会主義の道を歩みはじめた。1949年までのブルジョア、官僚階級の図書館は、人民大衆に奉仕する図書館に変わった。図書館政策は、その指針のもとに決議、実行され、国の経済発展と歩調を揃えて推進されていくのは1949年以降の図書館の特徴である。中国の図書館学は新しい時代に入った。図書館学の研究者はマルクス・レーニン主義の立場、観点、方法を用いて、図書館学の性質、対象、内容についての研究を始めた。1966年後半から文化大革命が始まり、その後約10年の間は、中国の図書館学研究は空白状態に陥った。

これらの変動により、1949年から1977年までの間は中国図書館学の変換期であると考えられる。

3) 1977年から現在までを、中国図書館学の発展期とする。

1977年文化大革命の終結が宣言された。それ以来中国の図書館事業は社会主義近代化の図書館に向かって急激に回復、発展しつつあり、伝統的な管理方法と現代化された技術の併存段階へ移行している。図書館学校は、50年代には2つの大学にしか設けられていなかったが、この時期に入って、40余りの大学に設けられるようになった。また、大学院修士課程、博士課程も設置された。全国と各省・市・自治区の図書館学会が相次いで成立された。図書館雑誌、著作、論文は急速に増加し、1980、1990年代の1年あたり平均論文発表数は1950、1960年代の10数倍になるなど。新しい進展が見られた。これらにより、この時期は中国図書館学の発展期であると思われる。

B. 分野の区分

図書館学関係の論文及び中訳論文の分野は、『図書館学論文索引第一輯』、『図書館学情報学档案学論著目録1949-1980』、『図書館学情報学論文索引1981-1989』と『図書館学情報学論文題録』の分類体系を参考して、第1表のように10種類に分ける。

1) 図書館事業

図書館事業という分野には、図書館事業に関す

第1表：図書館学論文の分野

番号	分 野	範 囲
1.	図書館事業	図書館の政策、図書館の相互協力とネットワーク、図書館の機構および活動、図書館学者、図書館史、図書館の各種類
2.	図書館学教育	学校教育、現職教育
3.	図書館学理論	図書館学の意義、研究対象と範囲、図書館学研究方法、図書館学と情報学の関連、図書館学史
4.	図書館管理	図書館経営論、図書館組織、図書館制度、図書館作業標準化、図書館費用、図書館業務の評価、図書館建築、図書館設備
5.	図書館蔵書	蔵書構築、文献の収集、受入、整理、保存、製本、廃棄
6.	図書分類と図書館目録	分類法、シソーラス、件名表、分類作業、図書館目録作成
7.	図書館サービス	利用者研究、閲覧・貸出サービス、読書指導、図書紹介、参考調査サービス
8.	新しい技術の利用	図書館の電子化、機械的な情報検索、ニューメディア、マイクロ資料、文献複製、図書館業務の機械化
9.	目録学	目録学理論、目録学史、書誌作成、索引作成、抄録作成
10.	その他	図書学、図書史、地方誌、版本学、古籍整理、出版事業

る図書館政策、方針、任務、図書館法、全国的な図書館の機構と会議、各種類の図書館の機能、任務、性格、役割、図書館と図書館との相互関係などについての論文を含めることにする。

2) 図書館学教育

図書館学教育の分野には、図書館人材を育てる系統的な大学の図書館学教育を代表とする図書館学の学校教育と、図書館に勤めている職員を対象に、彼らの専門的知識と技能を養成するための現職教育に関する論文が含まれている

3) 図書館学理論

中国の図書館学理論研究の内容は主に次のようなものが含まれている。①図書館に関するマルクス、レーニン、毛澤東の論述と指示。②図書館に関する党と政府の指示と決議。③図書館学の研究対象、構成、性質、関連科学、目的と方法、図書館学史。④図書館と情報、知識、科学、図書および文献との関係。

図書館学理論の分野は以上の研究内容を範囲とする。

4) 図書館管理

図書館管理というのは、図書館の計画、実行、コントロール、調整などである。例えば、図書館職員に対する管理は選抜、募集、訓練、試験、賞罰などの方法によって、職員を合理的に組織し、人材を開発することが含まれている。

これらに関する論文は図書館管理の分野に収めることにする。

5) 図書館蔵書

図書館蔵書という分野には蔵書構築をはじめ、図書館に蓄積された資料の収集、受入、蓄積、保存、製本、廃棄などに関する論文を包括することにする。

6) 図書分類と図書館目録

本稿では図書分類と図書館目録と合わせて、図書館学の一つの分野として設置する。この分野の中には、分類理論、分類法、シソーラス、件名表、分類作業、図書館所蔵目録などに関する論文を含むことにする。

7) 図書館サービス

本稿の図書館サービスの分野では、閲覧・貸出

サービスをはじめとして、情報検索、SDI、レファレンス、文献複製および文献の展示、紹介、評価など多様なサービス、また様々な読者の要求を満たすため、利用者研究と利用者教育などの活動に関する論文が含まれている。

8) 新しい技術の利用

図書館における新しい技術の利用の領域では、主に第二次世界大戦後現われたコンピュータの利用をはじめ、図書館の機械化、ニューメディア、文献複製、マイクロ資料などに関する論文が属している。

9) 目録学

書誌学は、中国語で一般的に目録学といわれている。図書館目録は目録の作成における技術と方法に傾くが、これに対して目録学は目録の理論的な課題に重点をおく。

目録学の分野は目録学理論、目録学史、書誌作成、索引作成、抄録作成に関する論文を含めることにする。

10) その他

「その他」の分野には以上の分野に入らない図書館学領域の学問を含めることにする。図書学、版本学、文献学、地方誌、出版事業などに関する論文はこの分野に入れる。

C. 国別の選択

集計された図書館学関係の中訳論文は3種類、つまり翻訳（全文翻訳）、摘訳（一部翻訳）、編訳（編集した訳文）の翻訳論文がある。その中では、翻訳と摘訳の論文は、一般的には、原著者の名前と国籍が付いているが、編訳には、原著者の名前と国籍がほとんど記入されていない。

1901～1992年の発表された図書館学関係の中訳論文の原著者の国籍を分けて見ると、各時期に発表の多い上位の国は、ほとんど変わらず、アメリカ、ソ連、日本、イギリス、ドイツとインドの6ヶ国である。この上位の6ヶ国を中心に中訳論文数の統計を行なった。その6ヶ国以外の国の著者、あるいは数か国の共同研究者、国籍が記入されていない著者、原著者が記入されていない中訳論文の発表数は、すべて設置された「その他」の

中国図書館学に対する外国の影響

第2表： 1901年～1949年各年間の中訳論文の発表数

年代	件数	累積件数	年代	件数	累積件数	年代	件数	累積件数
1901	1	1	1918	2	14	1935	73	273
1902	1	2	1919	0	14	1936	35	308
1903	4	6	1920	1	15	1937	21	329
1904	0	6	1921	0	15	1938	3	332
1905	0	6	1922	0	15	1939	3	335
1906	0	6	1923	0	15	1940	3	338
1907	0	6	1924	2	17	1941	1	339
1908	1	7	1925	4	21	1942	3	342
1909	1	8	1926	5	26	1943	2	344
1910	1	9	1927	2	28	1944	4	348
1911	0	9	1928	3	31	1945	3	351
1912	1	10	1929	14	45	1946	7	358
1913	0	10	1930	12	57	1947	8	366
1914	0	10	1931	20	77	1948	9	375
1915	0	10	1932	23	100	1949	5	380
1916	0	10	1933	28	128			
1917	2	12	1934	72	200			

国別の欄に入れる。

III. 中訳論文の調査結果

A. 1901年～1949年

まず、年代別をみると、49年間訳文数の総計は380件となり、数字としてはとても少ない。しかし、その中に、1929年から1937年までの8年間には、289件中訳論文が発表され、1901年から1949年までの49年間の中訳論文全体の78.4%を占めた。そのうち、1935年に発表された中訳論文数は最も多く、73件である。(第2表参照)。

また、国別を比べると、第1図に示したように、この時期においては、アメリカからの訳文が最も多く、次は日本、ソ連、イギリス、ドイツ、インドの順番であることがわかった。

第2図からみると、1901年から1925年まで

に、日本からの中訳論文数は最も多かったことに對して、1925年以降、アメリカからの中訳論文が増えてトップになったのが特徴である。

そして、第3表は1901～1949年の間に図書館学に関する論文と中訳論文を分野別に統計したものである。分野別で中訳論文数が多い順に、①図書館事業、②その他、③図書分類と図書館目録、④図書館管理、⑤図書館サービス、⑥図書館学理論、⑦図書館蔵書、⑧目録学、⑨図書館学教育と新しい技術の利用となっている。

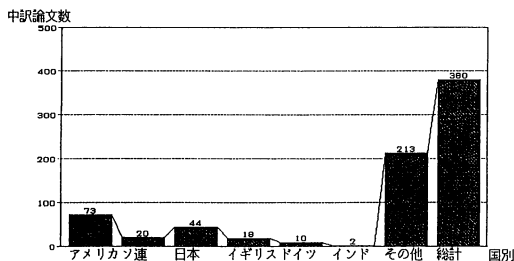
次には、この時期の分野別の中訳論文の多い順に沿って、各分野の論文全体に対する中訳論文の割合をまとめる。

中訳論文数が最も多いのは図書館事業分野である。そして、論文全体に対する中訳論文の割合も高く、7.6%である。

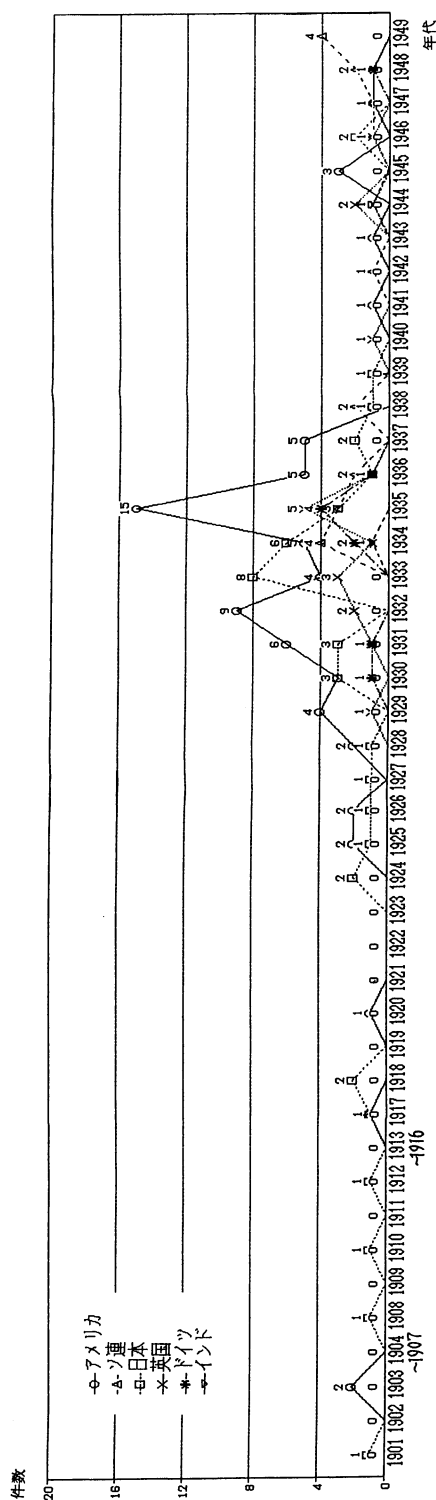
二番目になったのは図書学、版本学、文献学など中国図書館学の伝統的な研究領域を中心とするその他の分野であるが、この分野の論文全体に対する割合は5.3%である。

三番目は図書分類と図書館目録であった。この分野の論文全体に対する割合は6.2%である。その中では、図書分類に関する中訳論文は多いが、図書館目録の中訳論文は少ない。

図書館管理に関する論文も多く翻訳された。そ



第1図： 1901年～1949年中訳論文国別の発表数



第2図 : 1901年～1949年中訳論文発表数の推移(国別)

第3表: 1901年～1949年図書館学関係論文における中訳論文の割合(分野別)

	論文	中訳論文	
	件数	件数	%
図書館事業	2,380	180	7.6
図書館学教育	61	3	4.9
図書館学理論	371	25	6.7
図書館管理	185	36	19.5
図書館蔵書	285	14	4.9
図書分類と図書館目録	629	39	6.2
図書館サービス	550	31	5.6
新しい技術の利用	6	3	50.0
目録学	82	6	7.3
その他	809	43	5.3
総 計	5,358	380	7.1

して、論文全体に対する中訳論文の割合もとても高く、19.5%である。

図書館蔵書と図書館学教育の中訳論文は共に、論文全体の4.9%しかなかった。

新しい技術の利用に関する中訳論文はわずか3件であるが、この分野の全部の論文は6件である。論文の内容はすべてマイクロ技術の利用に関する論文である。

B. 1949年～1977年

1950年から1977年までの図書館学に関する論文は全部で2,839件ある。そのうち中訳論文の発表数は326件で、11.5%を占めている(第4

第4表: 1950年～1977年図書館学関係論文における中訳論文の割合(分野別)

	論文	中訳論文	
	件数	件数	%
図書館事業	760	87	11.4
図書館学教育	77	8	10.4
図書館学理論	47	20	42.6
図書館管理	97	9	9.3
図書館蔵書	358	31	8.7
図書分類と図書館目録	463	68	14.7
図書館サービス	334	47	14.1
新しい技術の利用	79	21	26.6
目録学	168	24	14.3
その他	456	11	2.4
総 計	2,839	326	11.5

中国図書館学に対する外国の影響

第5表： 1950年～1977年各年間の中訳論文の発表数

年代	件数	累積件数	年代	件数	累積件数	年代	件数	累積件数
1950	10	10	1960	16	252	1970	0	319
1951	3	13	1961	3	255	1971	0	319
1952	15	28	1962	8	263	1972	0	319
1953	40	68	1963	18	281	1973	0	319
1954	37	105	1964	7	288	1974	1	320
1955	25	130	1965	22	310	1975	2	322
1956	16	146	1966	9	319	1976	2	324
1957	28	174	1967	0	319	1977	2	326
1958	27	201	1968	0	319			
1959	35	236	1969	0	319			

表参照)。また、第5表に示したように、1950年から1960年までの11年間には、252件中訳論文が発表され、1950年から1977年までの28年間の中訳論文数全体の77.3%を占めている。

次に、主な国別をみると、第3図のようにソ連からの中訳論文は232件である。他の国と比べ

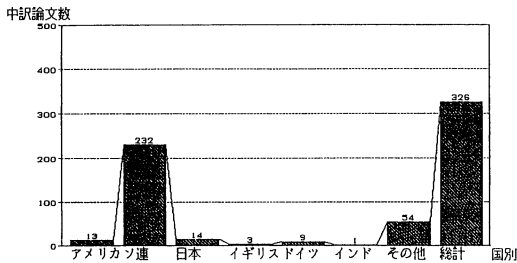
て、ソ連からの中訳論文は圧倒的に多い(第4図参照)。

そして、論文の分野別から見る。第4表は1950年から1977年までの間に図書館学に関する論文数および中訳論文数を10分野に分けて統計したものである。

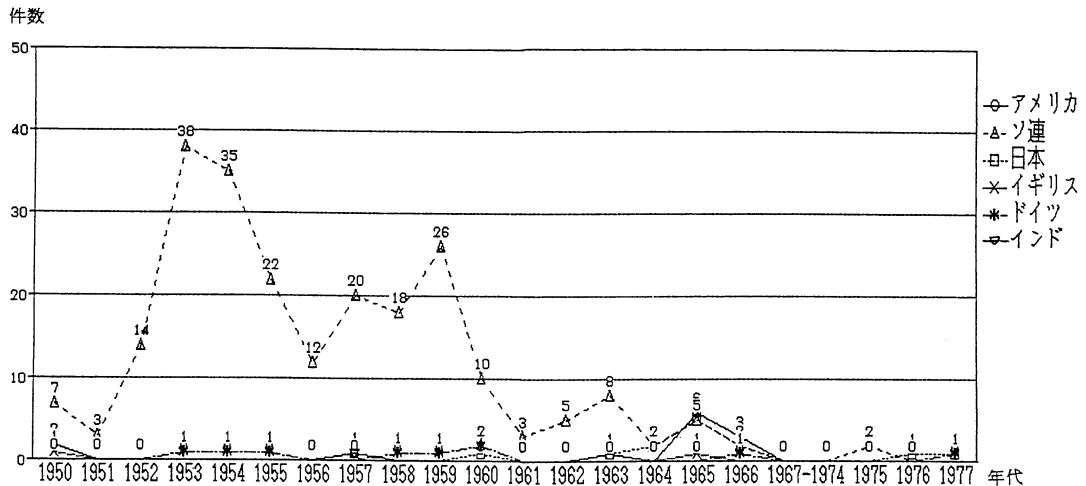
以下は、分野別の中訳論文の調査結果を見てみよう。

1) 図書館事業

1950年から1977年までの28年の間に図書館事業に関する論文の発表数は10分野の中で最も多く、そのうち中訳論文も10分野の中で一番多く87件で、ある。また中訳論文の内容からみると、ソ連をはじめ、10数ヶ国の図書館の紹介や評論が大半を占めて50件であり、そのうち、各



第3図： 1950年～1977年中訳論文国別の発表数



第4図： 1950年～1977年中訳論文発表数の推移 (国別)

種の図書館についての中訳論文は最も多く 28 件であった。国別でみると、ソ連からの中訳論文は 60 件あり、69% を占めた。

2) 図書館学教育

図書館学教育の分野の研究論文数が最も少なく、その中、中訳論文は 8 件である。論文数からみると 1901 年から 1949 年まで中訳論文数 3 件よりやや増えたが、国から見れば、8 件の中訳論文は全てソ連の図書館学教育に対する論文である。

3) 図書館学理論

図書館学理論に関する論文発表数は 47 件である。しかし、この中に発表された中訳論文は 20 件で、全体の 42% も占めている。この割合は図書館学の 10 分野の中で最高であった。そのうち、ソ連の中訳論文は 18 件、図書館に関するレーニンの言論の中訳論文は 10 件発表されている。

年代別と国別の発表状況を見てみると、50 年代には中訳論文はソ連の図書館学理論に集中していたが、60 年代に入ってから、アメリカの図書館学理論の論文も翻訳された。

4) 図書館管理

1950 年から 1977 年までの 28 年間では外国の図書館管理に関する発表された中訳論文は 10 分野の中で、図書館学教育の次に少なかった。また国別にみると、ソ連の 6 件と日本の 1 件とその他 2 件があった。

5) 図書館蔵書

1950 年から 1977 年までに外国の図書館蔵書に関する中訳論文は 31 件で、1901 年から 1949 年までの中訳論文 14 件より増加した。国別にみると、1950・60 年代には、ソ連の図書館蔵書に関する論文ばかりが中訳されていたが、1970 年代の後半に入って、日本やドイツの中訳論文も発表されるようになった。

6) 図書分類と図書館目録

1950 年から 1977 年までの間に発表された外国の図書分類と図書館目録に関する中訳論文数は 68 件で、図書館事業分野の 87 件に次いで 2 番目に多い。国別にみると、中訳論文の中には、ソ連をはじめ、アメリカ、日本、イギリス、ドイツ、

インド、オランダ、デンマークなどの国の論文の翻訳があった。しかし、ソ連以外の国の中訳論文はすべて図書分類についてであり、図書館目録についてのものではなかった。

7) 図書館サービス

1950 年から 1977 年までに図書館サービスに関する中訳論文は 47 件で、ほとんどが 1950 年代に集中している。1961 年に 1 件中訳論文が発表されたのを最後に、1977 年までは外国の図書館サービスに関する中訳論文は発表されなかった。47 件の中訳論文中、43 件中訳論文の原論文はソ連の研究者が書いたものであった。

8) 新しい技術の利用

1950 年から 1977 年までに図書館における新しい技術の利用に関する中訳論文数は 21 件である。国別に見ると、日本の中訳論文は 6 件で、アメリカは 4 件で、ソ連は 2 件である。中訳論文の発表期間は 1960 年代の前半に集中している。

9) 目録学

1950 年から 1977 年まで外国の目録学に関する中訳論文は 24 件で、1901 年から 1949 年までの 6 件よりだいぶ増加した。24 件の中、ソ連からの中訳論文は 23 件であった。

10) その他

1950 年から 1977 年までの間、図書学、図書史、文献学、地方誌、版本学、校讐学、古籍整理、出版事業などに関する論文総数が 456 件あった

第 6 表： 1978 年～1992 年図書館学関係論文における中訳論文の割合（分野別）

	論文	中訳論文	
	件数	件数	%
図書館事業	8,432	886	10.5
図書館学教育	2,313	244	10.5
図書館学理論	1,999	137	6.9
図書館管理	3,021	157	5.2
図書館蔵書	6,075	242	4
図書分類と図書館目録	3,984	140	3.5
図書館サービス	3,611	164	4.5
新しい技術の利用	4,058	630	15.5
目録学	1,807	57	3.2
その他	4,350	67	1.5
総 計	39,650	2,724	6.9

中国図書館学に対する外国の影響

第7表： 1978年～1992年各年間の中訳論文の発表数

年代	件数	累積件数	年代	件数	累積件数	年代	件数	累積件数
1978	7	7	1983	208	684	1988	240	2,086
1979	41	48	1984	293	977	1989	184	2,270
1980	67	115	1985	287	1,264	1990	171	2,441
1981	98	213	1986	296	1,560	1991	155	2,596
1982	263	476	1987	286	1,846	1992	128	2,724

のに対して、中訳論文は11件しかなかった。中訳論文の割合は2.4%であり、10分野の中では最も少ない。国別に見ると、アメリカは1件、ソ連は5件、日本は1件、ドイツは3件である。

C. 1977年～1992年

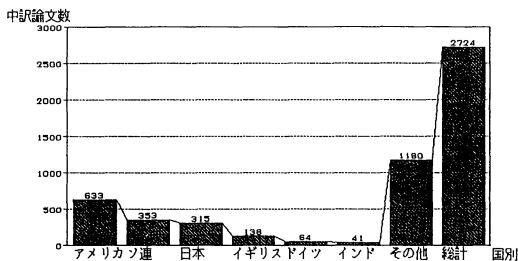
図書館学論文の全体をみると、1978年から1992年までの15年間に発表数は約39,650件に達した(第6表参照)。

次に、外国図書館学に関する中訳論文数の発表状況を見てみよう。1978年から1992年までの

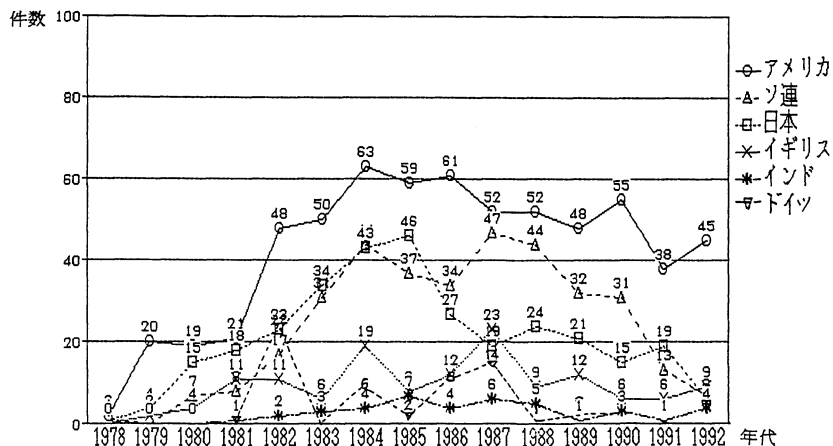
15年間に2,724件である。年代別でみると、1978年から1981年までに発表された中訳論文は213件、それは1982年1年間の中訳論文数263件にも及ばない。1982年から1988年までの7年間の中訳論文の発表数は増加のピークに達した(第7表参照)。

その中訳論文数を国別に分けると、アメリカからの中訳論文は最も多くで、次はソ連、日本、イギリス、ドイツ、インドである。ほかには、フランス、カナダなどの数十ヶ国からの中訳論文がある。主な6ヶ国からの中訳論文数を年代別でみると、アメリカの中訳論文数は各年において最も多く、ソ連と日本は1978年から1991年までは交替で2位である、ドイツは1982年と1987年にはやや多いが、ほかの年には少ない。イギリスとインドの中訳論文数は大体横這いになっていた(第5図および第6図参照)。

次には図書館学の各分野における1978年から1992年までの中訳論文についての調査結果である(第6表参照)。



第5図： 1978年～1992年中訳論文国別の発表数



第6図： 1978年～1992年中訳論文発表数の推移 (国別)

1) 図書館事業

図書館事業に関する中訳論文の発表数は前の創設期と変換期の数と同じで、依然として10分野の中では最も多く、8,421件であった。そのうち、中訳論文が10分野の中で一番多く886件で、全体の10.5%を占めている。

国別でみると、著者が数十ヶ国に及んだ中訳論文のうち、多い順の上位6ヶ国（アメリカの197件、ソ連の151件、日本の97件、イギリスの40件、ドイツの27件、インドの15件）の論文数は527件で、全体の半分以上となっている。

2) 図書館学教育

この分野では、1978年から1992年までの15年間での中訳論文の発表数は合計244件であった。その中、アメリカは72件、日本は48件、ソ連は27件、ドイツ13件、イギリス6件、インドは4件である。アメリカ、日本、ソ連の中訳論文の合計は147件であり、中訳論文全体の60.2%となっている。

3) 図書館学理論

1980年代の外国の図書館学理論の代表作が次々と中訳された。主なものは次の4つの著作、①O. C. チュバリヤンの『Общее библиотечное дело』、②J. H. シェラの『Introduction to Library Science』、③津田良成編の『図書館・情報学概論』、④S. R. ラングナタンの『Five Laws of Library Science』である。国別でみると、図書館学理論に関する中訳論文は、アメリカは33件、ソ連は28件、日本は13件、イギリスは6件、ドイツとインドは同じく2件という順になっていた。1978年から1992年までの15年間、外国図書館学理論の中訳論文の発表はずっと続けられているが、80年代の中期は中訳論文のピークである。

4) 図書館管理

1950年から1977年までの中訳論文はわずか9件に対して、1978年から1992年までの中訳論文は157件で大きく増加した。そして、国別でみると、1950年から1977年までのソ連の中訳論文数は6件で、全体の66.7%を占めることと違い、1978年から1992年までの中訳論文数はア

メリカが最も多く46件で、ソ連は19件で、日本は16件で、イギリスは4件で、ドイツは5件で、インドは3件である。

5) 図書館蔵書

1978年から1992年までの図書館蔵書の中訳論文の242件の中では、アメリカは最も多く54件で、次にソ連は27件、日本は24件、イギリスは15件、インドは2件、ドイツは1件と続いている。この6ヶ国の合計数123は全体の約半数を占めた。また年代別にみると、1982年から1988年までは中訳論文のピークであり、毎年20件以上の論文が発表されている。

6) 図書分類と図書館目録

1978年から1992年までこの分野の論文数は3,984件で、そのうち、中訳論文は140件で、約3.5%を占めている。この二つの数字は共に10分野の中では第7位である。中訳論文の中、アメリカは37件で、ソ連は20件で、日本、イギリス、インドは同じく10件、ドイツは1件である。

7) 図書館サービス

1978年から1992年までに図書館サービスに関する論文は3,611件である。その中、外国図書館サービスに関する中訳論文は164件発表された。国別では、ソ連は37件、アメリカは27件、日本は19件、イギリスは10件、ドイツは4件、インドは2件である。図書館サービスには、1950年から1977年までの変換期に続いて、1980年代にもソ連からの中訳論文が最も多いのは印象的である。

8) 新しい技術の利用

新しい技術の利用に関する論文の発表数は4,058件であった。そのうち、中訳論文は630件で10分野の中で、図書館事業に次いで最も多い。国別でみると、アメリカは154件、日本は79件、イギリスは35件、ソ連は20件、ドイツは7件、インドは2件であった。

9) 目録学

1978年から1992年までにおける目録学に関する論文は1,807件で、そのうち、中訳論文は57件である。その2つの数字は共に10分野の中では最も少ないのの上に中訳論文57件は3.2%し

か占めなかったのである。その中、ソ連からの中訳論文数は最も多く13件で、次に、アメリカは6件で、日本は3件で、イギリスは2件であった。年代別で見ると、ソ連からの中訳論文は1982年から1987年までに集中的に発表され、他の時期には発表されなかった。

10) その他

中訳論文は67件であり、この分野の論文全体の1.5%を占めており、10分野の中で最も少ない。国別によると、1978年から1992年までのこれらの領域の中訳論文数はソ連の11件、イギリスの10件、アメリカの7件、日本の6件、ドイツの4件、インドの1件という順になっている。その6ヶ国に関する中訳論文は合計35件で、中訳論文総数67件の半分以上である。

IV. 外国の影響についての考察

III章は、1901年から1992年までに渡って、図書館学関係中訳論文の状況を調査した結果である。本章では、中訳論文の発表状況と関連づけて、中国図書館学に対する外国の影響を時代別、分野別、国別に分けて、考察する。

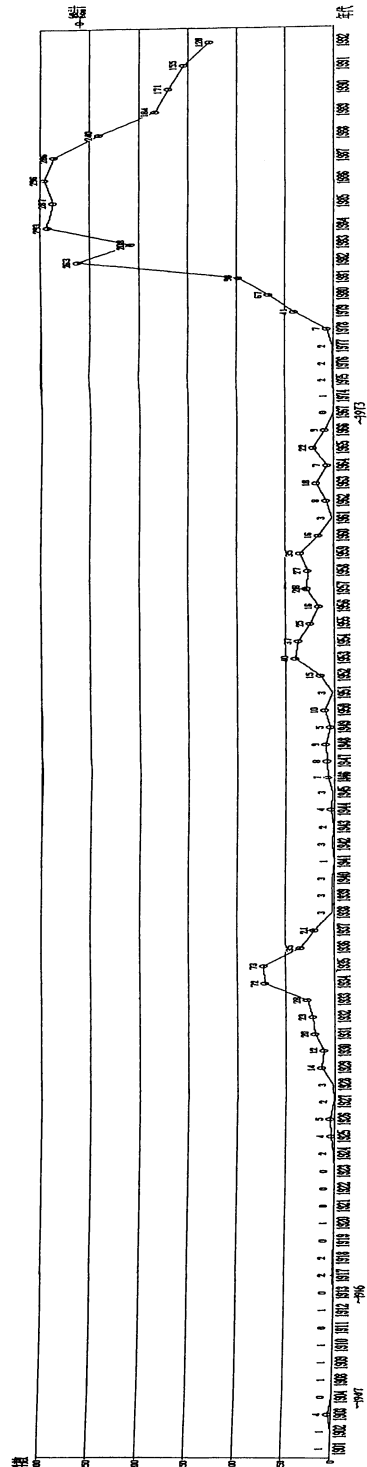
A. 時代別（第7図参照）

1) 創設期

1840年にアヘン戦争が起きた。これが導火線となって、中国の社会には大きな変化が起きた。外国勢力の侵入によって、清朝の支配力は急速に弱まり、中国は半封建半植民地の社会に陥った。こうした状況で、中国の知識人は、西洋の先進国の科学知識を学び、国を救う道を模索しはじめた。その中には、欧米の図書館の社会的な役割に目をつけ、図書館の普及により、庶民の知識レベルを向上し、国を強くしようと考えている人たちがいた。

1894年に出版された『教育世界』62巻に載っている「擬設簡便図書館説」という論文の中で、日本から輸入した和製漢語「図書館」という言葉がはじめて現われた¹⁴⁾。

20世紀の初期には、中国の近代図書館は、知識人の提唱と推進により、西洋図書館にならって、



第7図：1901年～1992年中訳論文発表数の推移

中国社会に出現した。

しかし、その後の国内戦争（例えば、辛亥革命）や図書館の経費の不足により、1917年までは、中国の近代図書館はまだ開始の段階にとどまっていた。

1917年から1927年までの間に、外国で図書館学を留学した中国の図書館学者は相次いで帰国した。彼らをリーダーとして、欧米の図書館学理論の導入、欧米の図書館経験の学習、近代図書館の発展を主旨とする新図書館運動が広がった。その運動の推進にしたがって、中国の図書館の全体は徐々に古代の蔵書楼から近代の図書館への変換を実現した。

また、この間、図書館を管理する人材を育成する図書館学校も登場した。アメリカの図書館学者クレモンズ (Clemens, Harry) は1913年に南京金陵大学図書館に就任した際、大学の文科系に図書館学科を設置した。

その後、アメリカから中国にきた図書館学者ウッド (Mary Elizabeth Wood) 女史は図書館に熱心な学者沈祖棻、胡慶生をアメリカに相次いで派遣し、図書館学を勉強させた。彼らは中国に戻った後1920年3月、彼女と共に武昌文華大学の中で、独立の学科として初めて学校教育を通じて系統的に図書館専門職を養成する図書科 (Boone Library School) を創立した。武昌文華大学図書科は沈祖棻と胡慶生の留学先、アメリカの図書館学者デューイが創設したアメリカのニューヨーク公共図書館学校 (New York Public Library School) を手本にしたものである。

他には、最初の4年制の図書館学系（学部）である上海国民大学教育科図書館学系は1925年8月に設立された。創立者杜定友はフィリピン大学図書館学部を卒業したのであるが、彼は図書館学部を創立したとき、20余りの欧米大学の図書館学授業科目を参考し、教育要綱を作った。

1925年4月、図書館学の研究、図書館の発展、図書館の協力を主旨とする中華図書館協会は上海で成立した。

創設期の外国からの影響は、新図書館運動の終わる1927年によって、おおざっぱに前期と後期

に分けることができる。

前期では、中国の近代図書館の誕生に伴って、西洋の図書館学は中国に伝わりはじめた。外国で図書館学を留学して帰ってきた早期の図書館学者は欧米の図書館学を導入し、図書館学教育と図書館協会は創設し、図書館学研究を始めた。

その時、発表された図書館学の論著はほとんど日本、アメリカをはじめ西洋の図書館学の論著の翻訳である。代表作といわれ、1923年出版された『図書館学』は、日本、アメリカの図書館学理論と実践を最も総括的に紹介したものである¹⁵⁾。

1927年以降、図書館学雑誌の創刊、新図書館運動の普及などによって、図書館学研究が全面的に展開された。中国図書館学者がアメリカ、日本などの図書館学著作、論文を翻訳すると同時に、外国の図書館学理論、方法を導入し、中国の実情と合致した図書館学を研究し始めた。その特徴は、図書館学理論に関する著作、論文が多く発表されたことである。これらの著作は中国の図書館学を検討し、図書館学研究を推進した。このような状況は1937年まで続いていた。その後、1938年から1949年まで、日中戦争、国内戦争が続いて、図書館の発展、図書館学の研究は低調の状態に落ち込んだ。

この中国近代図書館学の創設期における外国からの影響は極めて重要といえるだろう。

創設期中の論文の発表状況は次のような変化を示した。創設期中の論文は全部で380件で、一年当たり7.8件である。しかし、その中の1901年から1928年までの28年間は、わずか31件中訳論文が発表されただけであった。その後、1929年から1937年までの8年間は、中訳論文の第1回目の高潮となっていた。全体の約78.4%を占める298件の中訳論文はこの間に発表された。1937年から戦争が原因で、中訳論文の発表は低調になった。

2) 変換期

1949年10月の中華人民共和国の成立後、社会主義国家への移行ということが国の大きな課題となった。マルクス・レーニン主義思想を宣伝し、労働者が文化、科学知識を獲得する場所としての

図書館は、読者の閲覧を指導し、広大な群衆に向かって、図書の活用をはかるような政策を取り入れ、軌道修正をすることが急務となってきた。中国の図書館学の研究も新しい局面を迎えてきた。図書館学の研究者はマルクス・レーニン主義の立場、観点、方法を用いて図書館学を研究し始めた。

当時図書館学教育ではマルクス・レーニン主義政治理論科目の開設が十分に重視された。同時に、専門科目の内容にも、マルクス・レーニン主義文化理論、社会主義図書館業務の方針政策などの内容が加えられた。

1950年2月中ソ友好同盟援助条約が締結された。こうした状況の中で、中国の図書館界においては、政府の方針に従って、社会主義国家ソ連と友好を深め、ソ連の図書館学を学ぶという根本的基盤が樹立された。図書館学との交流は社会主義国家のソ連の図書館学を中心に展開された。50年代の初期には、中国の図書館学教育はソ連図書館学からの影響を受け、ソ連の図書館学の専門著作の翻訳は図書館学授業の教科書あるいは参考資料になった。1960年代に入ってから、中ソ論争の表面化によって、ソ連の図書館学の影響は徐々に小さくなった。

50年代の後半では、図書館学研究は高まった。図書館学討論会は相次いで行なわれた。図書館の技術、方法に対するだけでなく、図書館学の理論の探索も盛んになった。特に図書館学の性格、対象と内容に関する討論が展開された。代表的な学説は北京大学図書館学系の教授劉国鈞の「要素説」¹⁶⁾という説である。

図書館学の研究対象と内容についての論争は、60年代の中期まで続いた。論争の間に、他の新しい観点も提唱された。代表的な観点には、「矛盾説」と「法則説」がある。「矛盾説」は毛澤東の「矛盾論」という理論を用いて、図書館学の研究対象と任務を分析し、図書館学の主な研究対象は図書館に特有の矛盾であるという観点である。ただし、図書館の特有の矛盾に対して図書館学研究者の観点は異なる。最も有力な説は武漢大学図書館学系の黄宗忠の「蔵用矛盾説」¹⁷⁾である。一方、「法則説」は図書館学は図書館事業の出現、発展、

組織形態およびその実践の法則を研究する学問であると主張した¹⁸⁾。

1950、1960年代の中国図書館界の論争は図書館学理論研究を大きく促進したが、この論争は文化大革命の開始によって、中断された。

1966年後半から中国文化大革命が始まり、それから1977年8月に中国文化大革命の終結が宣言されたまでの約11年間、図書館学研究が低迷化していた時代である。また外国図書館学研究は全て停滞の状態になった。外国からの影響がゼロに近いことは中訳論文の発表状況の中でも明白に反映されている。

1950年から1977年までの中訳論文は326件であるが、その中、ソ連からの中訳論文は233件で、全体の71.1%を占める。また、その後、中訳論文が激減し、文化大革命期間中の1967年から1973年までの7年間に中訳論文はまったく発表されていないが、1952年から1960年までの9年間には、全体の73.3%を占める239件が発表された。これは1929年から1937年までの創設期の第1回目の中訳論文の高潮の後に来た変換期においての高潮であるといえよう。

変換期における外国からの影響の特徴として、この時期の影響は他の時期のものより単一であり、主にソ連一ヶ国に絞られ、しかも1950年代に限られていることがわかる。

3) 発展期

1977年8月になって第11回中国共产党全国代表大会が開催され、そこで中国文化大革命の終結が宣言された。それからは中国の図書館事業、図書館学は新しい時代を迎え、速いスピードで復興し、発展しつつある。統計によると、1970年に県以上の公共図書館は323館、1971年に大学図書館は328館であったのに対して、1987年の年末、県以上の公共図書館は2,400館、大学図書館は1,158館となったのである¹⁹⁾。

1960、1970年代文化大革命の間に低迷していた中国図書館学から、1950年代ソ連だけの外国図書館学の交流、また1930、1940年代の日中戦争、国内戦争の間の図書館学の不振までに遡ると、1970年代末ごろの中国図書館学と先進国の

図書館学との距離は明らかである。この距離を縮めるために、図書館学教育、図書館学研究も以前にはないようなスピードで進められてきた。

1) 図書館学校教育の発展は非常にはやく、教育のレベルは以前と比べることができないほどになった。

1981年から1990年までの10年間には、全国で、図書館学修士号の授与権を持つ大学の図書館学科は0から7まで増えた。1994年までに、図書館学博士号の授与権を持つ教育機関は3つとなった。

また図書館学科を持つ大学は、1977年までには、武漢大学と北京大学の二校しかなかったが、1987年には48校までに増えた。

2) 図書館学教育内容と科目の設置は大きく変わった。先進国の図書館学教育が参考にされ、情報学の内容が徐々に取り入れられた。

1977年、ソ連と欧米諸国の図書館情報学教育を分析した上で、科学技術文献検索、情報検索言語などの科目が増設された。1980、1990年代には、図書館と情報管理、文献情報処理技術、図書館自動化、データベース構築、図書館情報ネットワーク技術、情報検索、非印刷物の管理と利用などの科目が設置された。

3) 全国的な図書館学討論会が相次いで開かれた。1984年11月、浙江省杭州市で、中国図書館学会の成立以来はじめての全国的な図書館学基礎理論學術討論会が設けられた。1986年から1991年までには6回全国中青年図書館学情報学討論会が開催された。

4) 多くの図書館学研究者が育成された。その研究成果は各自の論著の中に浸透された。中国図書館学の水準を代表している。

5) 図書館学研究対象に対する多くの新しい観点が現われた。例えば、①図書館学の研究対象は文献の伝達と情報の交流である。②図書館学の研究対象は文献資源の開発と利用である。③図書館学の対象はメディアを利用して、知識を伝達する法則である。

6) 図書館学雑誌と論著は多くなった。1977年から1992年まで創刊された図書館学雑誌は約

60種で、発表された論文は約4万件になった。

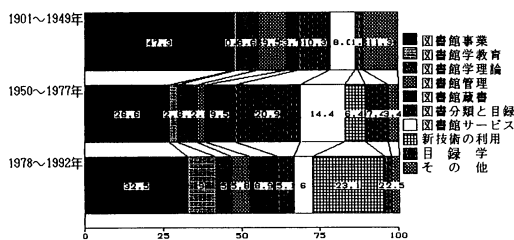
数十年の空白期により、ソ連を除き、外国の図書館学の代表作、新しい理論、方法、技術に関する論文はほとんど翻訳されていなかったため、80年代では、あらゆる領域の外国図書館学の論著の翻訳が発表された。外国の図書館学の理論と方法の導入は、中国図書館学を豊富にし、図書館学の発展を促進した。

この時期の中訳論文の発表数の推移も外国からの影響を物語っている。1978年から1992年までの中訳論文数は2,724件で、1901年から1977年までの中訳論文数706件の約3.9倍である。その中、1979年から1986年までの間は、中訳論文数が急上昇して、1986年には最高の296件に達し、外国からの影響が高まることがわかる。また1982年から1988年までの7年間は、毎年200件以上の中訳論文が発表され、1901年から1992年までの92年間の最高期ともいえる。1986年から中訳論文数はどんどん減少していたが、これは、中国の図書館学と外国の図書館学との距離が縮められていることと、中国の図書館学研究者たちが論文の数より、論文の質を求めるようになったことを反映しているのではなかろうか。

B. 分野別

次に、中国の図書館学を分野別に分けて外国からの影響を考察する。

1) 図書館事業 各時期には次のような特徴が見られる。まず、創設期では、図書館事業はまだ初級の段階で、図書館学の研究も始まったばかりであった。外国図書館事業に関する研究は外国図書館学研究の重要な部分とされていたが、主に外国図書館状況を紹介する程度であった。この時期図書館事業に関する中訳論文数もこの状況を証明した。図書館事業に関する中訳論文は146件で、中訳論文全体の約半分47.3%を占める。それらの論文は43ヶ国の図書館のことを紹介した。また、変換期では、ソ連の図書館は中国図書館のモデルとなった。この時期外国からの影響と言えば、ソ連をはじめ東ヨーロッパの社会主義諸国の影響しかなかった。そして、発展期では、図書館事業に



第8図：各時期における分野別中訳論文の割合の比較

関する研究は一段と進められた。外国の図書館と交流が開かれたことに伴い、中国図書館事業の発展の参考として多くの外国図書館が紹介された。この時期に発表された中訳論文の中では、60以上の国の図書館が紹介された。また、新しい研究領域（例えば、図書館法、図書館ネットワークなど）でも多くの中訳論文が発表されている。

全体を見ると図書館事業に関する中訳論文が中訳論文全体に占める割合は創設期では最も高く、47.3%で、変換期では26.6%、発展期では32.5%である（第8図参照）。各時期とも10分野の中で最も高いのである。

2) 図書館学教育 創設期では、欧米図書館学教育の方式は、中国の図書館学教育に対して重要な役割を果たした。また、変換期では、ソ連からの影響も一方的であった。発展期に入ってから、中国の図書館学教育は先進国のレベルと比べてかなり遅れていたことが周知されるようになった。また、中国では図書館学人材に対する需要が高まったなどの影響で、図書館学教育およびそれに関する研究が急速に発展してきた。アメリカ、日本、イギリスなどの国の図書館情報学教育に関する研究は、とくに教育方法、経験に関する研究が盛んになった。

図書館学教育に関する中訳論文が中訳論文全体に占める割合は創設期の0.8%、変換期の2.5%で、共に最も低いのであった。これに対して、発展期に入ってから9%になり、「図書館事業」、「新しい技術の利用」に次いで3番目に高い。外国図書館学教育に対する関心が高まったことが明らかになる。

3) 図書館学理論 図書館学理論に対する研究は

中国近代図書館学の誕生からずっと続けられているが、各時期における図書館学理論に関する研究はそれぞれの特徴をもっている。創設期では、中国の図書館学理論はアメリカが代表とする西洋の図書館学理論の影響を全面的に受けていた。変換期に入ってから、社会主義図書館学と称したソ連の図書館学理論に傾いていた。同時に、マルクス、レーニンの図書館思想の研究と、中国の特色がある図書館学理論の研究もはじめられた。発展期では、さまざまな外国の図書館学理論が中国に紹介されたのが特徴である。

各時期の中訳論文の割合の推移はこの変化を示した（第8図参照）。3つの時期の平均率は5.3%で、決して高い割合ではない。そして、そのうち、創設期では6.6%、変換期では6.1%、発展期では5%で、外国からの影響は大きな変化が見られない。

4) 図書館管理 創設期では、たくさんの近代図書館が創立されたことによって、図書館管理は図書館学研究の大きな課題になっていた。中国の図書館管理方法を決めるには外国図書館の経験を参考することが必要であった。変換期では、図書館管理には政治的な要素が入り、ソ連以外の影響はほとんどなかった。発展期では、再び外国図書館管理の研究成果を中国の図書館管理に取り入れる研究が行なわれるようになったが、図書館の環境が違うなどの原因で、成果がなかなか挙げられなかった。とくに、80年代末からこの分野の中訳論文は多く減った。研究者の関心は外国図書館管理から離れる傾向が見られた。

中訳論文全体に占めるこの分野の中訳論文の割合の推移は、このような変化を表わしている。中訳論文の割合は創設期で9.5%から、変換期の2.8%までに減って、その後、発展期ではまた5.8%に上昇した。

5) 図書館蔵書 図書館蔵書に関する研究範囲は、3つの時期の間に、だんだん拡大されている。創設期の研究は主に図書選択、図書の記入と図書の保存という3つの領域であった。変換期では、以上の3つの領域のほかに、図書の整理、廃棄などが取り入れられた。さらに、発展期では、外国

から図書館蔵書に関する新しい理論、方法が導入された。例えば、蔵書構築が図書館蔵書に関する研究の中に取り入れられ、重要な課題となった。

そして、中訳論文の割合を見ると、創設期では3.7%と少ないが、変換期では9.6%、発展期では8.9%を占め、全体的には10分野の中で3番目となっている。この分野における外国からの影響はかなりあることは明らかである。

6) 図書分類と図書館目録 この分野は中国図書館学の伝統的な研究領域である。創設期では、中国古代の四部分類法と分類目録から近代の図書分類と目録記述法に変換させるため、DDCを始めとして欧米のさまざまな新しい分類法が紹介され、外国からの影響は大きかった。変換期では、中国の大型図書分類法と目録規則は次々と編纂されたため、外国の図書分類法と図書館目録に関する研究は創設期よりさらに高まった。この傾向は1976年の『中国図書館図書分類法』の出版まで続いていた。

この傾向は中訳論文数の中でも反映されている。この分野の中訳論文が各時期の中訳論文全体に占める割合は、創設期では10.3%で、変換期では20.8%で、いずれも高いが、発展期では、7.2%までに減少した。

7) 図書館サービス

中国図書館学の創設期から、外国図書館サービスに対する研究も全面的に行なわれている。変換期に入ってから、ソ連の影響を受けて、図書館サービスは最も政治的な意味を持つ研究領域だと認識され、図書紹介、読書指導などの領域では共産主義教育の方針が取り入れられた。発展期では、国外の情報学の影響を受け、図書館サービスの領域は拡大された。図書館における情報サービス、利用者研究、図書館有料サービスなど新しい研究領域が展開された。

外国からの影響の変化を表わす中訳論文全体の中に占めるこの分野の中訳論文の割合の変化は、創設期の8.2%から、変換期の14.4%を経て、発展期の6%となっている。

8) 新しい技術の利用 新しい技術の利用に関する研究は、図書館学の中で最も発展が速い分野で

ある。創設期では、新しい技術の利用というのは、マイクロ複製に関するものだけであった。また、変換期における、1950年代と1960年代前半のソ連図書館学への一辺倒と、1960年代後半から1977年までの文化大革命による図書館学研究の停滞により、新しい技術の利用はかなり遅れている分野である。ところが、発展期に入ってから、アメリカ、日本などの先進国の影響を受け、コンピュータの利用をはじめ、文献複製、マイクロ資料、視聴覚資料、CD-ROM、機械翻訳、図書館機械化など研究は飛躍的に展開された。

この分野の中訳論文の発表状況は外国からの影響の変化を現わしている。10分野の中に、新しい技術の利用に関する中訳論文が中訳論文全体に占める割合は創設期では0.8%、変換期では6.4%、発展期では23.1%である(第7図参照)。また、この分野の中訳論文は論文全体の15.8%を占めており、10分野の中で最も高いのである。このような著しい変化は、新しい技術の利用の領域の拡大を示しただけではなく、外国からの影響が大きいということも現わしている。

9) 目録学 目録学は中国古代から研究されていた分野である。図書館学の創設期では、この分野に関する研究はそれまでの学術史の角度から初心者の読書、学問の研究の道を開くという主旨に沿って、進んでいた。変換期では、レーニン目録学思想、マルクス主義文献目録学などの研究がはじめられ、ソ連目録学の研究が盛んになった。発展期に入ってから、目録学研究には2つの傾向が見られる。一つは伝統的な目録学研究が減少していたことであり、もう一つは、アメリカや日本からの影響で、計量書誌学、書誌調整など新しい領域の研究が始められたことである。

10分野の中訳論文の割合の推移をみても、外国の目録学に関する研究状況が反映されている。中訳論文の割合は創設期では最も低く1.6%で、変換期では一旦7.4%までに上昇したが、発展期ではまた2.1%までに減少した。これは目録学に関する外国からの影響と一致している。

10) その他 「その他」の中では、中国の伝統的な研究領域が多い。各時期において、外国からの

影響は領域によって変わる。19世紀後半、西洋の印刷技術の伝来に伴い、中国の図書出版事業が大きく発展していたため、創設期では、図書印刷技術、図書出版に関する研究が多かったが、変換期では、図書学の一部として外国の参考図書に関する研究が増えていた。しかし、この分野の研究は全体として、変換期では、創設期よりだいぶ減っていた。またこの現象は発展期まで続いている。

中訳論文の割合もこの現象と対応して、創設期の11.3%から、変換期の3.4%、発展期の2.5%までに減少した。

C. 国別

外国の図書館学に関する翻訳論文3,430のうちでは、明記されたアメリカの著者の中訳論文数は719件、ソ連は605件、日本は373件、イギリスは159件、ドイツは83件、インドは44件であった。この6ヶ国からの中訳論文数は最も多く、中訳論文全体の57.8%占めている。アメリカ、ソ連、日本、イギリス、ドイツ、インドの6ヶ国は中国の図書館学に対する影響が最も大きいことが明らかになった。

時代別で見ると、創設期の初期（1901年から1924年まで）は、日本からの中訳論文数は最も多く、1925年から1949年まではアメリカからの中訳論文が最も多かった。変換期ではソ連からの中訳論文数は232件で、全体326件の71.1%、アメリカは13件、日本は14件、イギリスは3件であるから、ソ連からの影響力は断然にトップとなっている。発展期では、中訳論文の多い順で、1位はアメリカで633件、2位はソ連で353件、3位は日本で315件、4位はイギリスで138件となっている。いずれも各時期の外国図書館学研究の現状と一致している。

20世紀の初期の中国で、近隣の日本を範とした改革運動が推進されたとき、図書館界で、明治維新以来の日本の図書館の経験に学ぼうとしたのは当然なことであった。1920年前後、アメリカに留学した中国の図書館学者は次々と中国へ戻り、彼らはアメリカの図書館学を中国に導入した。中国の図書館学は日本に学ぼうという姿勢か

らアメリカに学ぼうという姿勢へ変わった。変換期のソ連からの影響については、前にも述べたように50年代の中国とソ連は同じく社会主義国家で、かつ友好な関係を持っていたことに起因する。発展期では、中国と先進国との交流が再開された。アメリカをはじめ、日本、イギリスなどの先進国から新しい図書館学理論、方法、技術が中国に導入された。しかし、ソ連からの影響もまだ残っている。従って、この時期では、中国の図書館学はアメリカをはじめ、多くの国から影響を受けている。

分野別で見ると、外国の影響はソ連図書館学の影響とアメリカ、日本、イギリスが代表する西洋の図書館学の影響との2種類に分けることができる。この2種類は共に中国の図書館学の全体に対するものであるが、それぞれ特徴がある。ソ連の影響が読者サービス、目録学、その他という分野で変換期から発展期までずっとトップに立っていることに対して、アメリカなど諸国の影響はソ連の影響力が最も強い変換期にもかかわらず、新しい技術の利用分野では常にリードしている。

V. おわりに

19世紀末から現在までの各時期における中国図書館学に対する外国の影響を考察した結果として、次の点が明らかになった。

1) 中国の図書館学に対する外国の影響の強さは、中国の政治的、社会的な変動によって大きく変わることが明らかになった。日中戦争の間1938-1945年と、文化大革命の間1967-1977年には、外国との交流は停滞の状態になったことに対して、安定な発展時期の1929-1937年、1952-1960年と1982-1988年の間には、外国の影響が大きい。

2) アメリカ、ソ連、日本、イギリス、ドイツとインドの6か国は、中国図書館学に対して創設期、変換期と発展期を通して最も影響が大きい国である。

3) 各発展時期における外国の影響はそれぞれ特徴がある。創設期においてはアメリカ、日本を代表とする西洋の図書館学の影響は極めて重要で

あった。変換期では、ソ連の社会主義図書館学が中国図書館学のモデルとなっていた。70年代末からの発展期では、アメリカ、日本をはじめとする諸外国の図書館学理論、研究方法、新しい技術が多く吸収されたことが特徴である。

4) 各国の影響を分野別で見ると、ソ連の社会主義図書館学とアメリカをはじめとする西洋の図書館学は共に中国の図書館学全体にわたって影響を与えているが、ソ連の影響は図書館サービス、書誌学の分野において特に強く、アメリカ、日本は新しい技術の利用の分野において、常に最大の影響力を持っているのが特徴である。

5) 各時期における外国の影響は分野によって異なる。図書館学理論の影響は各時期において大きな変化は見られないが、図書分類と図書館目録、図書館サービス、書誌学への外国からの影響は変換期において、特に高かった。一方図書館学教育と新しい技術の利用の影響は、発展期に入って急速に高まっている。

中国の図書館学の歴史をまとめて見ると、中国の図書館学の発展は外国の影響と密接な関係があることはいうまでもない。本稿では、中国の図書館学に対する外国の影響が考察した。この考察はあくまでも、発展途上の一国の図書館学に対する外国からの先進的な理論、方法、技術の導入についての考察ではあるが、図書館学の発展に与える外国の影響が明らかになった。そして、先進国の理論、方法、技術の導入に対する社会、政治、経済の影響も明らかになった。

本稿は、外国の影響は中国図書館学の発展の重要な要因であると考え、中訳論文に着眼し、統計的な方法を用いて、中国近代図書館が誕生した19世紀末から、現在にいたるまでの中国近代図書館学の歴史的な過程に対する外国の影響を系統的にまとめた。

また、マクロの角度から中国図書館学に対する外国の影響を明らかにした。しかし、内面的な側面から外国の影響、その役割、導入された後の発展を解明し、また、発展途上国の図書館学は如何に先進国の図書館学から新しい理論、方法、技術を導入すればよいのか、先進国として、発展途上

国の図書館学の発展をどのように受け止めるべきか、さらに、世界の図書館学の発展を促進するために、図書館学の国際的な交流のメカニズムを解明することは今後の研究課題であろう。

最後には、本研究を行なうにあたり、慶応義塾大学文学部図書館情報学科の上田修一教授からは、終始極め細かくご指導をいただいた。また、慶応大学文学部図書館情報学科のほかの先生方からも貴重な助言をいただいた。そして、慶応大学大学院文学研究科図書館情報専攻の院生の皆さんからも、有益なアドバイスをいただいた。ここに謝意を表わす次第である。

注・引用文献

- 1) 蔵書楼は主に南北朝から始まった書籍を収集するために作られた蔵書専用建物を指す。例えば、書籍を収集する学者の個人所有の蔵書場所である個人蔵書楼などがある。
- 2) 中国では多くの図書館学者は「古代図書館学」という用語を使うが、その概念内容については合意がない。本稿では、中国近代図書館学を中心に焦点をあてて検討するため、その以前の図書館思想、図書館に関する知識、図書館活動、図書館研究などに関しては、触れないので、全体としては「古代図書館学」とする。
- 3) 李鐘履. “図書館学論文索引第一輯”. 北京, 商務印書館, 1959. p. 367.
- 4) 華東師範大学図書館学系. “図書館学情報学档案学論著目録 1949-1980”. 上海, 上海人民出版社, 1984. p. 393.
- 5) 南京図書館. “図書館学情報学論文索引 1981-1989”. 北京, 書目文献出版社, 1993. p. 863.
- 6) 北京大学図書館学情報学系. “図書館学情報学論文題録一九九零年”. 北京, 北京大学図書館学情報学系資料室, 1991. p. 130.
- 7) 北京大学図書館学情報学系. “図書館学情報学論文題録一九九一年”. 北京, 北京大学図書館学情報学系資料室, 1992. p. 149.
- 8) 北京大学信息管理系. “図書館学情報学論文題録一九九二年”. 北京, 北京大学信息管理系資料室, 1993. p. 153.
- 9) 楊建東, 羅德運. “中国図書館の形成と発展”. 湖北高校図書館, No. 3, p. 5-11 (1985)
- 10) 密浩. “図書館学原理”. 上海, 華東師範大学出版社, 1988. p. 294-303.
- 11) 謝灼華. “中国図書館学史序論”. 武漢大学学报(社会科学版), No. 3, p. 122-128 (1985)
- 12) 石呈祥. “關於図書館学發展史分期的問題之我見”. 圖書与情報, No. 2, p. 6-10 (1991)
- 13) 吳仲強. “中国図書館学史論”. 中国図書館学報.

中国図書館学に対する外国の影響

- No. 2, p. 20-24 (1992)
- 14) 吳仲強ほか. “第2章 2. 中国近現代図書館学”. 中国図書館学史. 長沙, 湖南出版社. 1991. p. 27.
 - 15) 裴成発. “20世紀前半叶の中国図書館学”. 図書館理論与实践. No. 3, p. 42 (1992)
 - 16) 1932年に出版された『図書館学要旨』の中では、劉国鈞は図書館学の研究対象については「要素説」を提唱した。図書館の構成要素は、①図書、②人、③設備、④方法という4つである。図書は原料で、人はその原料を整理利用し、設備は建築を含み、原料の貯蔵庫、人の仕事場、図書の利用場所である。1957年、劉国鈞は5要素説を提唱した。つまり、図書館事業は①図書、②読者、③責任者と幹部、④建築と施設、⑤実践方法という5つの要素から構成されると主張した。
 - 17) 黄忠宗は1962年、“蔵と用は図書館業務の両方であり、図書館業務の基本内容を構成する”，“蔵は用の条件で、用は蔵の目的であり、蔵がなければ、用は考えられない。両者はお互いに依存、促進するだけではなく、同時にお互いに制約する。蔵は特定の目的と需要によって行なうべき、それは、用と離れて考えることはできない。用は蔵に基づき、蔵書があることが前提条件である”と指摘し、「蔵用矛盾説」を主張した。
 - 18) 吳慰慈. “図書館学基礎理論研究概述”. 中国図書館学報. No. 1, p. 4 (1991)
 - 19) 中国大百科全書総編輯委員会編. “中国大百科全書：図書館学情報学档案学”. 北京, 中国大百科全書出版社. 1993. p. 602-604.